

六花
10



2019

りっかはいくかい

山田六甲

百歳飴

鎮

秋に入るでんでん虫は知恵の輪に
駒ヶ岳野分の雲に走りけり
百歳の寝釈迦の耳に昼の虫
灯は生者胡弓は死者へ風の盆
泣きさうで泣かぬ空なり風の盆
三味の音の闇かざりゆく風の盆
風の盆胡弓の闇のさんざめく
若狭男のふるさと近し風の盆
出番待つ花街の子らや風の盆
風の盆出番待つ子のふざけあひ

賑やかな花街の闇も風の盆
人恋はば胡弓泣きゐる夜の秋
稲美野の日暮れてきたる彼岸花
砥峰とのみねの泥舐めてゐる夜の鹿
恋情の暴発せしや花芒
稲美野の夕日の中の秋の鷺
彼岸花探しに来しと夫婦かな
夏柳宗祇の水に散りにけり
踊り下駄三足を履きつぶすとよ
享年にすれば百歳虫すだく

雪嶺抄 花火 笹村 政子

鳥居抜け夏越の風となりにけり
ゆるやかに曲がる飛石半夏生
人力車やり過ごしては水を打ち
川音のなじみてきたる川床料理
葛切や玻璃のゆがんでゐる老舗
ビヤガーデン一番星の現はるる
かなかなや水の流れの平らかに
海開きかしまりたる漁師かな
花火屑そのまま兄弟帰京せり
手花火にしやがめば母と居ることし

高華抄

青 岬

佐津のぼる

皮を脱ぎたる若竹の青葉肌
苔咲いて怒り隠るる忿怒仏
青岬下描きのみで画家去れり
板前の涼しき音の高足駄
端居して昨日に似たる夕ごころ
砂浜に祢宜の杳あと海開き
昼寝覚め欠伸のあとに又あくび
常夜灯は石のぼんぼり宵祭
曝すにはややのためらひ発禁書
部屋干しのシャツ外に出す梅雨晴間

打ち水や人待ち顔の路地となり

善野 行

黒南風にぞくりとさわぎ立つ田かな
声明の地を這ひ甕の蓮へと
ビール飲む昼は妖しき柳筋
古町や水打つ刻の夕ごころ
打水や人待ち顔の路地となり
荒梅雨や寝床に好きな句集など
戸を引いてうかと守宮を落としけり
端麗の空となりけり梅雨晴間

うちみずやひとまちがおのろじとなり ぜんのごう

花街を思い起こす人もあろう。昼間の酷暑から逃れるように水を打ち客を迎える態勢に入る。と言う場面から離れて、茶道のこととも干渉でき、招客を招き入れる準備がととのったことを示す打ち水かもしれない。

茶の亭主は準備が整いましたので、どうぞと茶室に招き入れる。舟の花入や、中にも外にも水を打ち。荒々しく打ったり、薄板の上に、水を打ったりしているが、邪気を祓う意味もある。路地は流派、家によっても違いますがおおよそ中露地、腰掛待合、内露地などと定められている。その路地の光景を意識して詠んだのかも。人待ち顔が絶妙。花街か茶かは作者はいわれない。その方が鑑賞の幅が広がる。

雪卿集 せつけいしゅう

住田千代子

志方 章子

つなぐ手の闇の蛍に解かれけり
緑青の樋きはやかや旱梅雨
紫陽花の雨に嬉しき便りあり
松籟の空ゆがみたる夏至の夕
夏落葉重たき音の一つして
浜昼顔砂やはらかく崩れけり
靴跡は浜昼顔のところまで
遅れ来し人にビールを注ぎにけり

夏のれん越しの会話のちぐはぐに
夏暖簾の下潜りきし赤子かな
ほうたるや父母そばに居る心地
尺蠖の墓石を計りぬたりけり
アマリリスきつぱり咲きし朝かな
床涼み下を魚の過りけり
蜘蛛の糸消えては現るる日よりかな
寝そべりて一日過ぎし梅雨晴間

升田ヤス子

出口 誠

母に似る夫の足音庭石菖
太宰忌の訂正を貼るピンセット
谿川の色の青紫蘇ジュースかな
握らせて子の五指に蟬余りけり
わだなかの驟雨の翳り近づき来
珠は魂月下美人のひらき初む
月下美人雨のしづくの消えやらず
月下美人にはかに虻の呻きけり

上半身えさにつけたるかぶと虫
流木を刺しても平気滝の水
滝落ちて石の白く染まりけり
夏の蝶風もないのに傾けり
滝落ちてしぶきのかかる遠くまで
滝つぼにペットボトルの浮いてをり
滝の前皆を集めて「はいチーズ」
瀧つぼに入つてみたくなる我が身

永田万年青

善野 行

年寄りのお隣どうし水を打つ
くれなづむ打水あとの床几かな
打水の風足許に生まれ来し
打水の残りを鉢にお裾分け
水撒きのホースが手から離れけり
虫籠に力の限り鳴ける蟬
溽暑なる肌着剥がしてもらひけり
蟬時雨三種類まで聞き分けり

黒南風にぞくりとさわぎ立つ田かな
声明の地を這ひ甕の蓮へと
ビール飲む昼は妖しき柳筋
古町や水打つ刻の夕ごころ
打水や人待ち顔の路地となり
荒梅雨や寝床に好きな句集など
戸を引いてうかと守宮を落としいけり
端麗の空となりけり梅雨晴間

藤生不二男

谷口 一献

陶枕の闇に首を沈めけり
海開き雨の神事をなりにけり
夕立の側溝に水走りけり
夏蝶のとまらむとするばかりなり
明け易き夜をひたすら寝りをり
端居してある日の父に重なりぬ
恙なく過ぎし一日を疎みけり
ひぐらしのこゑの澄みゆく水の上

船の出で黄昏色の麦酒乾す
長旅を終へし安堵や鮎落つる
雨しとど苦きうるかで先ず一献
福祉てふ職の重さや酔芙蓉
風鈴や眠る右脳に響き入る
億劫の一語に尽きる夜の秋
秋めいてめりはりのなき日の過ぎぬ
秋めくや関西弁上手いおうむ

雪樹集

平居 濤子

廣畑 育子

授るは娘ばかりやビール飲む

亀の背をちよんと突つく鬼やんま

槍の穂を仰ぎてビールすすみけり

未草長けゐて支へ合ひをりぬ

手水舎の干支の手拭梅雨じめり

町会の褒美にひとつ缶ビール

塔心礎とり巻く蓮の皆開く

ビールが兼題引つ提げて町に行く

焼失の塔まざまざと蓮の上

飲めたらなあ酒舗にながめるビールかな

水色のカップセル葉夏の風邪

新幹線見ゆるが売りよビヤガーデン

大内 幸子

江見 巖

白南風や音軽やかな電動車

巻貝の一つ動くや晩夏光

白南風や机の仕事久しぶり

海の日を見たく燈台のぼり来る

一輛車西日の席は空いてをり

磐座に詩魂の宿る滝の裏

睡蓮を殖やし永住帰国かな

白靴やカーテンコールの下に見ゆ

夕立の来さうな雲行き風の向き

血管を仏に通す蓮の花

青田波自転車止めて畦話

遺伝子の登つて行くや振り花

田尻 勝子

苦瓜のいきなり血反吐を浴びせけり

虫の音と夜空を浮遊してをりぬ

飛び石の浮いてくるまで水を打つ

水打ちの向う三軒始まりぬ

水打つや小さき命を蹴散らして

台風の始まり鳥の空流る

赤松 赤彦

里帰り風呂で聴いてる遠花火

あれれのれ鼠花火の何処へやら

藪中を照らしてゐたる揚花火

早寝して鼓膜に伝はる遠花火

部屋中でロケット花火してゐたる

花火師のきりりと巻きしタオルかな

延川五十昭

石棺の蓋の割れをり原爆忌

打ち水や紅の鼻緒をぬらしつつ

原爆忌夕日の中の母の里

打ち水や土の匂ひを涌き出して

民宿に水着干しあり原爆忌

打ち水にあわて散り散り蟻の列

現役の路面電車や原爆忌

散水や枝垂れ桜に届かざる

濡額の字のあらあらし原爆忌

水草のお土産付きの目高来る

南京の古街に咲ける瓜の花

ばばともの育ててくれし目高かな

延川 笙子

六花集

石川 憲二

吾が先に猫の寝そべる梅雨晴間
梅雨晴や光満ちたる路地の朝
梅雨明けと聞けども今朝の雨強し
曇天に交らず鳴くや油蟬
俄雨小さき家守走り去り

菊谷 潔

冷泉 花

田一枚植糸し農夫を照らす月
蚊用心障子あけしめ夏座敷
軒先の御簾の古さも夏景色
この夜更け心いたむか時鳥
蛸はまさに短夜のはじめかな

磯野青之里

中御門 出

風の痕残りてあれど茄子の紺
草を刈る一心無心鎌の音
海の日や古人望みし水平線
はためかぬトリコロールや巴里祭
課題図書風に捲られ昼寝かな

打水に蟻の行列出てきたり
打水に石苔匂ふ日暮れ時
打水に濡れたる煉瓦喫茶店
打水に顔に接吻なんの虫
曇天に迷ひに迷ひ打水を

螢雪譚 山田六甲

夏のれん越しの会話のちぐはぐに

志方 章子

音は通じるのに間に暖簾があるから、会話の腰が折れる。「あーら、志方政子さん」「えっよく聞こえないわ」それで「赤松さんのことだけじゃ」「えっ松茸食べたの」「よしてよ今度の吟行のことよ」「銀行でお金をおろすの二百万くらいならすぐ用意できるわ」「いやーね」「二億円よ」「一円を置くの？」という具合夏用の薄い生地でも暖簾越しに話がうまく伝わらないのは、目を合わさないで話してもうまく

会話が成り立たないということであろう。会話もやはり暖簾に腕押しの状態になるのだ。面白い句だが一句に切れがないのが夢風撰とせず候補と。



出口 誠

夏の蝶風もないのに傾けり

夏場の蝶々がとまつているとき、風もないのに、たたんだ翅が傾いた。どうしたのだろうという作者の気持ちが見えてくる。もしかしたら眠たくてよろけたのかもしれない、などと。夏蝶が作者の投影でなければよいが。夢風撰候補。

母に似る夫の足音庭石音

升田ヤス子

母とは義理の母で、夫の足音が夫の母親にそっくりになって来たのである。夫が庭に降り立って歩くと、母がそこに居るような気がする。

とある小説に息子を妻の不義理でできた子だと疑っていたが、ある日ふと足を引きずって歩くのを見て我が子だと確信した主人公。夢風撰候補。

この句に似たような話を俳壇でも耳にしたことがある。私は驚いたが、のちのちその俳人の父親の昔の写真を見て「親子だ」と確信した。俳人の母親は妬みの噂に過ぎなかったのだ。ヒトの口は怖い。